

平成 2 年 2 月 8 日

教 育 長 様

		代表者 校園名 :	大阪市立本田小学校		校印
		校園長名 :	錢本 三千宏		
研究コース		電 話 :	6581-1531	F A X :	6581-3194
グループ研究A		事務職員名 :	喜連 尋滋		
選定番号	109	申請者 校園名 :	大阪市立本田小学校		
校園コード (代表者校園の市費コード)		職名・名前 :	主務教諭	指野 淳	
561155		電 話 :	6581-1531	F A X :	6581-3194

平成31年度 「がんばる先生支援」研究支援 報告書

◇平成31年度「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	グループ研究A	研究年数	継続研究 (2年目)
2	研究テーマ		資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の実践的研究 ——効果的にICTを活用するための授業づくり——		
3	研究目的		大阪市教育振興基本計画の施策「ICTを活用した教育の推進」を効果的に行うため、「逆向き設計論」による授業づくりとカリキュラムデザインを実践的に研究することが本研究の目的である。次期学習指導要領は「内容ベース」から「資質・能力（コンピテンシー）ベース」の移行がなされている。その際、カリキュラムデザインと授業デザインを明確にして教育実践しなければ、「活動主義」や「網羅主義」（以下「双子の過ち」と記述）に陥り、児童にどのような力を育成したのかあやふやになる危険性が昨年度の研究で明らかになってきた。その上、ICTを意図的に授業で用なければ、ますます、児童の学び（獲得すべき「知」）と学習の成果はあやふやになる。学習のゴールを「永続的理解」として設定し、さらにループリックを明確にした評価活動を行う授業においてICTの活用は効果的になる。大量採用による若手教員の増加に伴い指導力の向上は大きな課題となっている。公開授業を複数回行い、学校情報化先進校として、効果的にICTを活用するための授業づくりを提案し、若手教員の指導力向上の一助を行っていく。		
4	取り組んだ研究内容		いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。 4月3日 「今、求められる学びと授業づくり—逆向き設計論と授業づくり」研究目的と計画の確認 京都大学教育学部大学院准教授 石井英真先生 5月 17日 プログラミング実技研修 ヴィーリング株式会社 中村一彰氏(非公開) 6月21日 ICT授業全国公開 プログラミング教育を中心に 早稲田大学教職大学院教授 田中博之先生(公開) 7月5日 「今、求められる学びと授業づくり」体育科授業研究会(非公開) 兵庫教育大学准教授奥村好美先生 7月23日 「パフォーマンス評価におけるループリックのワークショップ」兵庫教育大学准教授 奥村好美先生(非公開) 9月11日 「今、求められる学びと授業づくり」体育科授業研究会(非公開) 京都大学教育学部大学院准教授 石井英真先生 10月2日 日「今、求められる学びと授業づくり」体育科授業研究会(非公開) 日本体育大学片桐正弘先生 10月8日 「今、求められる学びと授業づくり」算数科授業研究会(公開) 筑波大学付属小学校盛山先生 10月 月11日 「今、求められる学びと授業づくり」音楽科・図工科授業研究会(公開) 筑波大学付属小学校平野先生 笠先生 11月 22日 「今、求められる学びと授業づくり」体育科授業研究会(非公開) 関西学院大学教授佐藤真先生 12月4日 「今、求められる学びと授業づくり」体育科授業研究会(非公開) 京都大学教育学部大学院准教授 石井英真先生 12月9日 日「今、求められる学びと授業づくり」算数科授業研究会(公開) 筑波大学付属小学校夏坂先生 12月20日 プログラミング実技研修 ヴィーリング株式会社 中村一彰氏(非公開) 1月22日 日「今、求められる学びと授業づくり」授業研究会(非公開) 関西学院大学教授佐藤真先生 2月 研究のまとめ 以上のように に算数科、音楽科、図工科、体育科、プログラミング教育を授業研究会を通して研究を深め、その一部は公開授業で研究成果を披露した。		

		<p>大阪市教育振興基本計画に示されている、<u>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</u>および<u>教員の資質や指導力の向上</u>について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。</p> <p>一番大きな成果は、本校の教員全員が次年度から本格実施される学習指導要領の趣旨を理解し、授業ベースで円滑に展開できる状態にあることである。「学力」ベースから「資質・能力」で展開される上で、「何を学ばせたか」という内容ベースの考え方から「学んだことをもとに何ができるようにできたか」というコンピテンシーベースに留意する授業観(授業に対する観念)を共有できたことである。この授業観の共有により、各教科で「見方・考え方」を踏まえ「観点別評価」を生かし「主体的・対話的で深い学び」への授業の設計に大きな一步を踏み出せた。</p> <p>ICTを授業で活用する場合、教師の授業設計の力量がないと活動ばかりの授業になり、「何を学んだか」「何ができるようになったのか」が不明になる。この「活動主義」の授業を私たちは厳しく退けるようにしている。効果的にICTを授業で活用するための教師の力量を大学研究者の協力も得て明確にできた。それは4つの柱からなる。1. 教科の本質を追求する単元構想に関する力。2. 使えるレベルの学力を児童に提供する授業構想に関する力。3. 「目標に準拠した評価」の実現に関する力。4. カリキュラム改善に関する力である。</p> <p>効果的にICTを授業で活用するための教師の力量の4つについて1枚ポートフォリオという形式でアンケートを作成し、授業研究会の度に調査した。特に「パフォーマンス評価とはどのような評価なのか」「パフォーマンス課題を用いる意義は何か」「妥当性、真正性、レリанс、レディネスを踏まえパフォーマンス課題のシナリオはどう作るか」「教科の見方・考え方を踏まえた学習活動はどのようなものがあるか」「使える学力を育てる学習活動はどのようなものか」「ループリック作りから指導改善をどのように行うか」「ポートフォリオ評価法をどのように活用できるか」「資質・能力の3つの柱に対応する有効な評価方法は何か」という項目について明確に自分の意見を持つ教員が増えたことは成果である。このことは公開授業の場でも報告した。</p> <p>次年度から完全実施させる新学習指導要領を読み込み、各教科の「見方・考え方」をより具体的にするためにウィギンスとマクタイ博士の提唱する逆向き設計論に基づき、各教科について領域の「本質的な問い合わせ」、単元ごとの「本質的な問い合わせ」、「永続的理解」「パフォーマンス課題」についてサンプルをいくつか作成することができた。この作業により教員は各教科の構造をカリキュラムベース、単位授業ベースで検討することができ、構成主義の考え方で教材分析、教材研究、授業設計ができるようになった。</p>												
5	成果・課題	<p>児童の学びに向かう力の涵養がどの程度進んでいるかを測定するため、児童を対象に次の5観点でアンケートを行った。おおむね目標数値を達成できた。</p> <p>1. やりたいと思ったことが学習できただけ。(90%) 2. 同じ過ちを繰り返さないように学習できただけ。(92%) 3. すでにしてしまったことに修正を加えたり、次を改善することができただけ。(91%) 実際に学習したことについて、何を、だれに、どうしたのかを詳しく説明できただけ。(88%) 5. 学んだことは自分にとって有意義であったか。いろいろな場面で役立ちそうか。(70%)</p> <p>4.</p> <p>公開授業を4回行った。公開授業参加者の満足度は95%であった。ICTを授業で活用するためには教科内容を構造的に把握し、「児童が使える知識・技能を定着させる」「児童が思考・判断・表現している過程をICTで可視化する」「学習での対話を促進するツールとして活用する」「タブレットを使用するというデジタルとノートに記述するアナログのバランスを重視することが学習活動の設計には不可欠だ」などの感想を参観者からいただいた。プログラミングを中心として公開では、特別支援を要する児童のいきいきした姿に参観者から驚きの声が上がった。</p> <p>《まとめ》</p> <p>資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の実践的研究には本校の教職員の「児童が学んだことを様々な場面で活用することができるようにならう」という総意と「資質・能力を育むための授業力を教師自身が身に着ける」という熱意が根底に流れていた。しかし、総意と熱意だけでは解決しないものがあることも経験した。それは、教育の潮流、それも世界的な潮流、それとともに社会が求めている学校教育の在り方の知見、授業やカリキュラムの設計の能力である。職能教育の大切さを実感し、多くの研究者の指導を仰いだ。ICTを授業で「普段使い」している私たちが取り組んだのは「効果的な活用」である。そのために必要な教育理論の一つが「逆向き設計論」であることを確信した。今後も地道な研究を続けていく。</p> <p>《課題》</p> <p>私たちの手元に一冊の書籍がある。オランダの教育学者ガート・ビースターの「教えることの再発見」である。「いわゆる『伝統的な』教授に対する批判が、教師を『壇上にいる賢人』から『自体馬鹿にした表見である』が『『学習者の傍らにいる支援者』にし、さらには『学習者のうしろにいる仲間』にさえしてしまっている現実がある』『もし、あなたが、児童が成長した主体であることに関心をもつならば、それは児童が自由になることができる場を創造することではなく、児童が、彼らの自由と出会うことができ、成長した仕方で主体として世界の中に存在することを求める『呼びかけ』に出会うことができる実存可能性を創造することである』と説いている。教えることの復権を我々は研究しなければならない。</p>												
6	研究発表等の日程・場所・参加者数	<p>研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。</p> <table border="1"> <tr> <td>日程</td><td>元年6月21日</td><td>参加者数</td><td>約100名</td></tr> <tr> <td>場所</td><td colspan="3">大阪市立本田小学校</td></tr> <tr> <td>備考</td><td colspan="3"></td></tr> </table>	日程	元年6月21日	参加者数	約100名	場所	大阪市立本田小学校			備考			
日程	元年6月21日	参加者数	約100名											
場所	大阪市立本田小学校													
備考														